
転生☆戦国学園武将伝

愁(^ω^)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生☆戦国学園武将伝

【Nコード】

N4467H

【作者名】

愁（^ω^）

【あらすじ】

戦国の世を駆け抜けた武将たちが現世に生まれ変わった！？ある学園で武将たちは集う！友情、恋愛、野望が織りなす学園系時代物語。（一部BL描写があります）

土の章：序章

何度でも、何度でも、

アナタを探します。

何度でも、何度でも、

アナタを護ります。

だから、

土の章：第1話

『今、なんて？』

『……ただ』

え？なに……？

『……様、○○様アアツ！！』

私は”あの時”誰の名を呼んだの？

＊

「おはようございます、犬千代さま」

「……まつ？…おはよ、……って！犬千代っていわないでよ」

「まつの旦那様は犬千代さまただお一人、…犬千代さまが例え、」

女子として生まれ変わってもッ！

何度このやり取りをしたか、解らないぐらい、”昔”からの仲らしい。

＊

私立戦霊学園。

今、私が通っている高校で、結構姉妹校を持っていたりする。でも私は首都圏にある親校に入学した。

私が、前田利家というちょっと変わっている名前を親からもらったがそこを省けば、どこにでもいる、女子高生だ。

まつとはこの学園で知り合った。

「今、何時間目？」

「…お昼休みですよ」

「じゃあ、ご飯食べに行くか」

「はいVV」

まつはちよつと変わっているけど、たまに変なことを言うけど、気の合う友達だ。

「今日は、犬千代さまが好きなハンバーグと卵焼きも入れておきましたよ」

「まつの卵焼き……、甘くないやつ？」

「勿論！」

「…屋上、行こうか」

屋上は立ち入り禁止なので人気が少なく、空も見れるので好きな場所だ。

まつは普段真面目だが、立ち入り禁止の屋上にはついてくる。

なんで？と一度聞いたことがある。

その時まつは笑って

「空が好きだから」と答えた。

土の章：第2話

2人は屋上に来て、弁当の包みを広げ、昼食をした。

「空、青いですね」

「……当たり前じゃん」

これもいつものやりとりだ。

しかし、私がそう答えると、まっはどこか寂しそうな顔をするが、
その以外にどう答えるべきか解らないから仕方がない。

＊

「おやおや、仲つむまじいご様子だ」

物陰でそいつらは利家たちを見ていた。

「まつ殿は覚醒していますね」

「恩人はまだみたいだな」

「「恩人？」」

「なんでもアタシが一揆を利用して豊臣に一泡吹かせようとしたん

だって、ま、根も葉もない噂に過ぎなかったんだけど、それが秀吉に聞かれて、処刑されそうになった。そんなところを、秀吉の大親友の利家が弁解してくれて無罪。『伊達殿が一泡吹かせようとするなら徹底的に考え抜いた策を使うだろ、馬鹿だな、秀吉』とか何とか」

「ほう、それでは挨拶に伺わなくてはなりませんな」

「幸村がいくのか？ならアタシもー」

「はあ、貴方たちが行っても無駄ですよ、嫌われ者の私が行きましよう」

「まあ、うん確かに、」

「嫌われていますよね」

「黙らっしゃい、大体、覚醒させなければ元も子もないじゃないですか」

「…死ぬかもよ？」

「良いのです、私は、償わなければならない、織田方を一掃しなかったことを」

「歪んでやんのーな、幸村」

「そうですね、まあここは歪んでらっしゃる明智殿に任せて、政宗殿、お腹空いていませんか？オススメの甘味どころをご紹介しますのですが」

「行く！じゃあな☆明智ッ！！これが今生の別れてやつかもな」

「ハイハイさようなら、バカップル」

＊

「そうそう、また変な夢みたんだけど」

利家はいつも”変な”夢をみるとまつに教えていた。

「それであの方は出てきたのですか？」

2人には聞き慣れない声があった。声があった方に振り返った。すると、銀髪で長ったらしい髪を持ち整った顔立ちをした男が一人いた。

「…誰？まつ、知り合…」

ふと利家がまつをみると、まつは今まで見たことがないような人相になっていた。

「…で、……明智、光秀エエッ！！」

土の章：第3話

刹那、まつの右手に光が集まり、長刀が出てきた。そしてまつはそれを振りかざす、まるで舞を踊るかのように美しく、華麗に。

光秀は刀でそれを弾き返した。

「槍の又左の妻はだてではない様子、ですね」

「……槍の、又…、左？」

”今”の利家にとって聞き慣れない言葉だった。しかし聞き慣れないはずなのになんだか懐かしい。

＊

『俺”たち”の通り名だ』

だ、誰ッ!？

『だれでも良いだろ……』

いや、よくないからッ!!

『少し、駄借りるからな』

＊

そこには少女はいなかった。

かわりに、1人の男がいた。現代には似つかわしい派手な柄の和服を着流し、長い髪を雑に高い位置に纏めていたその男の瞳は、血のように紅く、まるで幾つもの血に塗られた戦場をそのままその色に仕立てあげたような色だった。

「犬千代さま？」

「まつか？ 久しいなッ！！」

前田利家が”覚醒”した。

「…まさか、そんな、……覚醒するなんて、………持って帰って、地の力ぶんどりますか」

光秀は不適に笑い、武器を構える。

「地の力？ 犬千代さま、それは」

まつは、はっとした。

利家の左手には光が凝縮され、殺気の塊のようなものが収まっていた。

「誰がお前なんかに渡すかよばあッ！この躰は一応、処女だからな！！信長様とまつ以外には絶対譲んねえ！っーか死ねッ！！」

途端、その光を利家は地につけ、屋上のコンクリートにひびがはいり、岩のように鋭くなった”それ”は光秀の方へと飛ばした。

「くっ！今回はこの対策なしでしたからね…お暇をいただきます」

そういつて光秀は逃げ出した。

「ま、待て！！」

「よい、ほっとけ」

そのうち自ら俺の前に現れるだろう。

「……はい」

「まつ、悪いが時間のようだ」

え？と、まつが利家の方を振り返ると、”利家”は全体が白い光に包まれていた。

光は語った、
『俺』は俺と似ていてうつけた。
だから、見守って
くれ』と。

「――ッ!?!…はい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4467h/>

転生☆戦国学園武将伝

2010年10月10日22時19分発行